〈論　文〉

〈記憶の伝承〉は可能か？（Ⅰ）～想起する身体について

松　島　恵　介

0. はじめに－何が伝承されるのか？

われわれは，記憶が伝承される，というと，漠然と記憶の内容が人から人へ伝わる，というイメージを抱き易い。しかし，そもそもの定義からいえば，記憶されるものは〈もはや存在しない過去〉である。はたして〈もはや存在しない過去〉は，人から人へ，あたかも荷物のように受け渡すことが可能なものなのであろうか。

先の大震災から数年を経た現在，記憶の伝承はいかにして可能か，という問いはきわめてアクチュアルでクリティカルな問題になりつつある。しかしこの大きな問題について考える前に，いまいちど，そもそも〈もはや存在しない過去〉＝記憶を想起するとはいったいどういうことなのか，という根本的な問題から考えてみることにしたい。そこから，じっさいには何が伝えられるのか，あるいは伝えられないのか，という議論が始められるべきだと本稿は考える。

1. 記憶とは，そして想起とは

1–1　記憶とは

本稿が主題的に取り組もうとする記憶の対象は，個人が体験した具体的な出来事である。これは，記憶の種別でいえば，「エピソード記憶」とよばれるものであり，いわゆる知識といったものに代表される記憶（意味記憶）とは区別される。

当然ながら，この体験そのものは，もはや過ぎ去っており，想起の場においては不在であることが前提とされる。

では，想起という活動によって，もはや存在しないかつての体験はふたたび「そのまま蘇ってくる」のであろうか。

この素朴な問いはじつのところ極めて深い意味をもつように思われる。

想起によってかつての体験が蘇ってくるとすれば，それは過ぎ去った体験をもういちど，まるごと「再体験」することになるのであろうか。そしてもし想起が再体験であるとすれば，それは想起を聴く者においては，その何が伝わることになり，また，何が伝わらないことになるのであろうか。

我々が最終的に行き着く場所となる「記憶の伝承」というアクチュアルな課題にしっかりと向き合うために，まずはこうした基本的かつ具体的な議論から始めよう。

1–2　〈痛みの想起〉において，痛みは想起されているといえるのか？

まずは日常的な事例から，できうる範囲で考えていくことにしよう。

以下では，哲学の領域において，記憶や知覚のはたらきをめぐって粘り強い思考を続けた大森（1992）の論を補助線にしながら，この問題を考えていくことにしたい。ただし，本稿は哲学の理論を精緻化することを目的とするものではなく，記憶の伝承という実践の問題に向かう論考であるから，こうした知見はあくまでもひとつの参考として利用するにとどめておきたい。

さて，大森は，昨日において体験した「歯の痛み」がどのように想起されるか，という問題をめぐって次のように述べている。

「昨日の歯痛を今想起するとき，たとえかすかにでも歯が痛むだろうか」

きわめて単純な物言いにも聞こえるが，ここにはじつは大きな問題提起がなされているのではないか。

通常，われわれは想起という行為を，過去をふたたび蘇らせるものである，と素朴に理解しがちである。かつて体験された様々なものは脳内に貯蔵され，それは検索によって呼び出され，再現される・・・こうした，いわゆる伝統的な情報処理のメタファで語られる記憶観は，ひろくわれわれの社会に偏在しているといってよい。

しかしここで，大森は，過去に経験された痛みは決して蘇ってこないのではないか，と問い掛ける。大森の言に促されて改めてじっくりと考えてみるならば，たしかに，昨日たまたま生じたけれども本日にはすっかり消滅してしまった歯の痛みは，今ここで具体的に想起しようにも「歯痛そのもの」は蘇ってこない，すなわち，それは再現されることはない。

よくよく考えてみると，もし厳密な意味において，想起するたびに痛みが再現され復活するならば，事態は平静なものとはならないだろう。おそらくは，再び鎮痛薬や治療がただちに必要になってくるであろう。想起するたびにこのような状況になるならば，誰も酷い経験の想起などすることはないだろう。しかしわれわれはしばしば，過去の酷い体験を事細かに語りながらにこやかに談笑することもあるのだ。

このように，想起のつどに現在の身体はかつてと同じような知覚を再現することになる，と考えるのであれば，それはもはや想起ではないように思えてくる。それは単なる症状の再発であろう。あるいは，PTSD という病態における，特殊なフラッシュバックの症状にも該当しよう。いずれにしろ，想起とはかつての知覚の再現ではないように思われる。

1–3　想起における「パブロフ的想像知覚」

ただ，その一方で，歯痛を想起しつつ，思わず顔をゆがめてしまうような体験はありうるし，これはわれわれの経験的事実としてはかろうじて認めておかねばならないだろう。ここに痛みらしきものすら全く無い，などと言い切ることについてはまだ幾ばくかの躊躇が残る。

痛みそのものは再現され得ない，と大森はいうが，ここでわれわれの顔をゆがめさせた何ものかは，いったいなんだろうか。痛みの一部のようなもの，あるいは弱められた痛みのようなものとは考えられないのだろうか。

> 「痛みがあるとすれば，それは『誤解』であり『錯覚』である」

大森はこのように明確に言い切る。

ただし，この「痛みがあるとすれば」という言及からわかるように，大森もどうやら〈痛みのようなもの〉がどこかに発生すること自体は微かに認めているようだ。ただし，それは痛みそのものではなく，「錯覚」であり「誤解」であるという。

これはいったいどういうことなのか。大森はつぎのように述べている。

> 「想起とともに新たに痛みなどが喚起されることはありうるが，それはパブロフ的想像知覚であって想起ではない」

このように，想起において現れる〈痛みのようなもの〉があるとすれば，それは，かつての痛みではなく，「新たな痛み」=「パブロフ的想像知覚」である，という(1)。

この大森独特の言い回しを直ぐに理解することは極めて困難であるから，われわれとしてはすこしずつこの言及を分解しながら，ゆっくり理解していくことにしよう。

先ずここで「パブロフ的」と呼ばれているものは，「パブロフ型条件付け」として心理学の領域においてひろく知られるものに該当する。確認しておくならば，たとえば，ある犬に対して「ベルを鳴らす→エサを与える→唾液が出る」という事態を繰り返した結果として，「ベルを鳴らす→唾液が出る」という新たな事態が生じる，というのがその概略である。この「犬はベルを鳴らされただけで唾液を分泌するようになる」という事態の出現をもって，「パブロフ型条件付け」の成立とされる。

ところで，われわれは一般に，何らかの身体反応があるならば，それを生じさせた実体的な原因がどこかにある，という因果関係的思考に親しんでいる。したがって，唾液の分泌という実際の身体反応があるとするならば，それを生ぜしめた具体的な対象物とそれに対応する知覚がどこかに存在する，と無前提に想定しがちである。しかしながら，先のパブロフ型条件付けが成立したとき，唾液の分泌を生じさせた具体的な物体とそれに呼応する知覚とはいったいどのようなものであったか。

本来，ベルの音と唾液の分泌には，そもそも予め何ら関連性がない，という事実に留意しつつ，事例をやや拡張して考えてみよう。たとえば，ベルの音という聴覚刺激の替わりに，ベルの絵という視覚刺激を用いても同じ唾液分泌効果は得られるのであるし，またそれを，ベルに触れるという触覚刺激に代替しても，何ら問題はない。そもそも，これらはベルに関連する事象でなくともよく，どのような刺激であろうと，パブロフ型条件付けは成立しうる。さらに付け加えるならば，それは直接に知覚に作用するような具体物でなくてもよい。たとえばある人物において，「〈民主主義〉という抽象的概念を思い浮かべる都度に，おいしいチョコレートを食べさせ，唾液を分泌させる」，という事態を長期にわたり何度も反復するならば，そののちには彼は，単に〈民主主義〉をイメージするだけで唾液を活発に分泌させることになるだろう。あるいは，単なる身体動作のみをもってしても（たとえば，腕を真横に動かす，など），さらには，「何かをしないこと」（たとえば息を止める，身体の動きを止める，思考を停止する，・・・など）でも，原理的にはまったく問題なく「それらのことだけで唾液を分泌させること」は可能になるのである。

すなわち，唾液は，それとはまったく無関係なもの（存在／非在問わず）によって，自由に出現させることが出来るのである。とすれば，われわれの日常において，ふと唾液が分泌されるとき，「それを生じさせたもの」は，厳密な意味では特定できないということになる。したがって，唾液の分泌という身体反応だけをもって，それを生じさせた対象がどこかに実在すると言い切ることはできないし，まったく同様に，それを引き起こした知覚がどこかに実在するなどと言うこともできないのである。

では，こうしたパブロフ型条件付けの基本構造を確認しておいたうえで，大森が「パブロフ的想像知覚」という語でいわんとしたことは何か，できる限りの接近を試みてみよう。

ごく日常的に，梅干しやレモンの形態的表象を想像しただけで唾液が分泌される，という事態が生じるのは周知の通りである。いうまでもなくこれもパブロフ型条件付けの一種である。留意すべきは，ここで想像されている対象が具体的な時空間を捨象した表象であるという点である。これは本稿と大森がともに問題にしている出来事の記憶，すなわち「エピソード記憶」とは異なり，抽象化され一般化された知識である「意味記憶」の領域に属する。さらにそれは，先述したように，かならずしも明確な図像的表象でなくともよく，きわめて曖昧なぼんやりとした表象であったとしても，唾液の分泌を促すであろう。大森が「想起」ではなく「想像」という語を用いた意味はこのあたりにあると思われる。すなわち，現実に梅干しやレモンを知覚（味覚）したときに唾液が分泌されるのとおなじように，単にそれらの意味記憶的表象の抽象像を曖昧に想像しただけでも，唾液は分泌されるのである。そしていうまでもなく，具体的に「おとい食した梅干し」の様相を想起したことによっても，まったく同じように唾液は分泌されることになる。とすれば，ここには，「唾液の分泌」という具体的事象の発生を共通項として，〈現実〉と〈想像〉と〈想起〉という三つのリアリティの次元が混同する基盤が用意されているといえるだろう。

さて，このあたりでようやく，大森が「パブロフ的想像知覚」と呼ぼうとしたものの輪郭がすこしずつ露わになってきたといえるのではないか。次節では少し別の角度からみていくことにしよう。

1–4　身体アクションから逆行的に惹き起こされる「知覚的なもの」

「悲しいから泣くというより，泣くから悲しいのである」。これはジェームズ＝ランゲ説（James-Lange theory）[(2)]としてひろく知られ，心理学に大きな変革をもたらしたとされる有名な言である。この説についてはこれまでさまざまな解釈がなされてきたが，ここでは，これを「心的なものが原因で身体アクションが生じるというよりも，逆に，身体アクションから逆行的に心的なものが構成される」の意として理解したい。

ここでいわれる「泣く」という行動を，先の「唾液を分泌する」という身体アクションに置き換えてこの理論にあてはめることは可能であろう（いずれも液体の分泌にかかわるアクションである）。とすれば，「唾液の分泌」というアクションは，それ自体において何らかの心的状態を逆行的に惹き起こすのだ，と考えられる。この心的状態をここで知覚としてとらえるならば，ここでは，たまたまなにかの拍子に出てしまった唾液を原因として，新たな知覚を生じさせる，という事態が発生しうるということになる。

やや複雑な構造になるが，先のパブロフ型条件付けの議論と絡めながら，大森的な「想像知覚」が発生し得るケースを具体的に想定してみよう。たとえばまず，おとつい食したものを想起した際に唾液がパブロフ型条件付け的に分泌されるとする。「パブロフ型条件付け的に」というのは，このとき，唾液をひきおこしたものが厳密な意味において特定できないという意味である。つぎに，ジェームズ＝ランゲ説的に，分泌されたその唾液を原因として逆行的に「おとつい食したものとは直接関係のない，新たな味覚的なもの」が発生する，としよう。そしてこの「味覚的なもの」が，おとつい食したものに近似していると主体に感知された場合には，それが「おとつい食したものの味覚」として錯覚される可能性はあり得るだろう。このようにして玉突き的に出現した疑似知覚的なものが，大森のいうところの「想像知覚」に該当すると考えてはどうだろうか。

ただし，ここでとりあげた「知覚」と，大森のいうところの「痛覚」，そしてジェームズ=ランゲ説が扱う「情動」という問題を同列に扱ってよいか否か，という疑問は残る。したがって，ここではある種の仮説的な可能性としてこの論を提示しておくにとどめておきたい。

2. 記憶における身体の持続性

さまざまな議論があるにせよ，われわれとしては，想起においては実際の知覚は再現されない，という立場を支持して論をすすめてきた。しかし，想起において知覚がよみがえってこないとすれば，想起において我々が感じ得る「過去のリアリティ」はいったい何によって担保されるのであろうか。そうしたリアリティをどこかに想定しなければ，記憶の伝承は単なる形骸化した情報伝達に終わってしまう，とする議論もある種の説得力を持つようにも思えてくる。

ただ，「過去のリアリティ」などというと，ともすると議論はやや主観的に抽象化された方向へと道を逸れてしまいがちである。われわれとしてはここに〈身体〉という実体的な基盤を置きつつ，具体的に論をすすめていくことにしたい。

2–1　「もはやない」過去と「ここにある」現在をつなぐものとしての身体

何度もくりかえすように，想起の場においては過去は常に不在であり，それはもはや取りかえしようがないし，また確かめようもない，きわめてあやふやで不確かなものである。むろん，記録という客観的媒体は存在するものの，それに寄りかかろうとするならば，「記憶の」伝承という本稿の主題からは逸れてしまうことになる。われわれは記憶という不在物を対象にしているのであって，常に存在物として定位しつづける「記録」を論じようとするのではない。

さて，われわれにとって，過去そのものは不在となっても，過去の時点から現在まで存在しつづけているものがある。それは，想起者の身体である。過去と現在という時間軸を通して「持続」している唯一のモノこそ，想起者の身体なのである。

ここに，想起において身体をポジティブに捉えなおすヒントはないだろうか。持続する身体によ

って，想起は可能となり，そして，想起における過去のリアリティは出現しうるのではないか，と。

ただし，身体の持続という用語を用いたとたん，ただちに次のような批判が生じるかもしれない。いわく，「身体は持続するものではない。身体の細胞は数か月のうちに，ほぼ入れ替わるという（たとえば，水島（2003））。一年足らずでわれわれは全く別の身体に生まれ変わっているのであって，身体の持続などという概念はまったくのフィクションであり錯覚なのである。云々・・・」と。

しかしここで主題的に論じたいのは，身体の物理的持続ではない。本稿が念頭に置いているのは，〈身体の構え〉と表現できるような，「対象への身体の向かい方」の持続なのである(3)。別の言いかたをするなら，それは，「対象に対してなされる身体の反応の仕方の構造」，というべきものである。まだ，ややわかりにくいだろうか。具体的に説明してみよう。

ただしこの種の概念は，それ自体をことばで表現しようとすると，多言を弄しても困難である場合が多々あるし，時として，ことばを尽くせば尽くすほど，意味の本質から遠ざかることもあるだろう。そうした場合は，むしろ，それが壊れたケース，断絶されたケースを具体的な事例とともに紹介することで理解が深まることがある。その方向でまずは考えてみよう。〈身体の構え〉が断絶することで，想起が不可能になるような事例としてはどのようなものがあるだろうか。

2–2　持続を絶たれた身体性

〈身体の構え〉の持続が断絶され，そのために想起が不可能になった事例として理解しやすいと思われるのは，たとえば，「自転車に乗れるようになる」ということを契機に劇的に変化する〈身体の構え〉の事例である。具体的に説明しよう。

自転車に乗れるようになるという事態は，「自転車に乗れない身体」から「自転車に乗れる身体」へと，自転車という対象にむかう〈身体の構え〉が大きく変わることである。これは身体における学習の事例として Reed（1994）が挙げたものであるが，Reed は，自転車に乗れるようになったとき，自転車に乗れなかったときの身体の有り様は想起できずただ「推論」されるだけである，と述べる。本稿の用語でいうならば，「かつて自転車に向かっていた私の〈身体の構え〉」を想起することができない状態になる。たとえば，ペダルを懸命にこぎながらも直進せずに右や左へとフラフラしていた状態，ハンドルをしっかり握りながらもそれが一向に安定せずぐらぐらしていた身体の有り様・・・それは現在の〈乗れる私〉からは推測あるいは想像されるものでしかなく，「想起」されることはないのである。

いうまでもなく，ここで過去と現在のあいだにあるのは，身体の物理的な断絶ではなく，「自転車という対象に向かう〈身体の構え〉」の断絶である。これによって想起という行為が不可能になった，と考えてよいだろう。

Reed は，学習という行為が，こうした大きな変容を発生させる，と述べる。すなわち，「できない」ことが「できる」ようになり，その対象に向かう〈身体の構え〉が大きな変容を被る際に，ひろくこうした「想起不能」が発生するというわけである。なお，Reed は言及してはいないが，これとは逆に「できる」ことが「できなくなる」ような場合（たとえば老化などに伴う身体性の変化）においても，同様の事態は生じうるものと思われる。

このように考えてくると，われわれの日常においては，至る所に「〈身体の構え〉の変化による想起不能」が確認できるのではないだろうか。

2–3　〈身体の構え〉の再生と想起

前節とは逆に，〈身体の構え〉の復活によって想起が可能になるような事例はあるだろうか。

佐々木（1984），佐々木と渡辺（1983, 1984），Sasaki（1987）は，認知心理学および認知科学の領域において「空書」という概念を提起している。空書とは，空に書く，ということに由来する概念で，たとえばある漢字が思い出しにくい時などにわれわれ日本人が指などで空中にその文字を書こうとする動作を指す。この動作によって結果的に当該の文字を思い出せることになるわけだ

が，逆にこの動作を禁止されると想起が困難になるという。この概念をわれわれの論考のヒントにしていこう。

いうまでもなく空書行動それ自体は，文字を書くという具体的動作と同じものではない。空に書くというスタイル以上に，それは実際のかつての文字書きそのままのアクションではないという点に留意しておきたい。たとえば，〈幣〉という漢字を思い出そうと空書するとき，はじめからこの文字を正確になぞらえる空書をする者はいないだろう。いるとすれば，それは最初から「思い出せている」者であり，そもそも思い出そうとして空書する必要はないのである。多くの「思い出そうとする」者は，〈幣〉のおおまかなイメージである「なんとなくの形」と表現せざるを得ないような，曖昧なかたちを空に書こうと（描こうと）するだろう。そうこう試行錯誤しているうちに，〈幣〉の漢字としての形態の詳細がふと思い出されるのである。

この「なんとなくの形」を書こうとする身体の動きとは一体何だろうか。それは，〈幣〉という字を書いていた手のそのままの具体的動作の正確な「再現」ではなく，〈幣〉という漢字にかつて向かっていた身体の指向性の構造という，やや抽象化された様態であるといえるだろう。それはわれわれのいうところの〈身体の構え〉に他ならない。文字想起を促す空書とは，まさに〈身体の構え〉を再現しようとする身体動作なのである(4)。

ここでわれわれにとって何よりも重要なのは，当該の文字を想起しようとする努力は，その文字の脳内表象的な記憶貯蔵物へと向おうとするのではなく，むしろ，空書という，かつての〈身体の構え〉の復興を試みる方向へと向かうことになる，という点である。文字の想起という目標は，意識的には第一義的なものであるにもかかわらず，こうしたことが無自覚にわれわれのなかで生じていることは興味深い。

こうした空書をめぐる議論は，想起における身体の役割を議論するわれわれにとって大きな示唆に富んでいるように思われる。なお，蓮實（1977）によると，こうした空書行動は，過去において漢字を覚える際に「書く」という行為を伴っていた事実が深く関わっているという。また，先述したように，漢字の想起時においてこの空書動作を禁止すると当該文字の具体的想起が困難になるという実験結果があることも知られている。漢字を想起するという，きわめて認知的な課題においても，過去から現在へと持続する身体性の構造，すなわち〈身体の構え〉が認知の働きを基本的に支えているのである。とすれば，われわれが主題とする，日常におけるさまざまな出来事の想起においてはなおさら，こうした〈身体の構え〉はきわめて重要な役割を果たしているのではないだろうか。

2–4 「身構えの回復」論

高木（1996）は，こうしたわれわれの無自覚な営みのひとつのあり方を，証言のみによってホロコーストを描いた映画「ショアー」(5)のなかに見出している。監督のランズマンは，映画の中で多くの人々にさまざまな想起を促す役割も果たしているが，高木によれば，彼はインタヴューにあたり出来得るかぎり「言語的な想起」を排除しようと努めているのだという。たとえば，当時の仕草や歌を再現させる，また当時の現場に再び出会わせる，といったことを想起者に求めることによって，人々がかつて持っていた「身構え」（われわれがいうところの〈身体の構え〉）をこの場において回復させるような手法が積極的に用いられているというのである。

記憶の伝承を主題とするわれわれにとって重要だと思われるのは，こうした「身構えの回復」によって，その身体が向かっていた対象が第三者にとって知覚可能なものとして現れうる，という高木の主張である。

高木は次のように述べる。

> 「ランズマンは変わらない現場と，変わらない身構えが出会うことによって「絶滅作戦」を直接知覚可能なものとして顕在化させようとしている。幼い子供であっても，視線によって他者がどこをみているかを即座に知ることができる。またわれわれは，スクリーンの向こうで動いている人のシルエットを見るだけで，その人

が重いモノを持っているのか，軽いモノを持っているのか，あるいは，柔らかいモノを持っているのか堅いモノを持っているのかをすぐに見て取ることができる。われわれは他者の身構えを知覚することによって，他者が向かっている対象をも同時に知覚できるのである。スレブニクが歌うこのシーンでは，ホロコーストの現場と再会した彼のシルエットつまり身構えをとおして，ホロコーストを直接知覚可能なものとして示すことが目指されている。」

最後に「目指されている」という言及があるように，ここに述べられているランズマンの試みは，ひとつの仮説の範疇にある。些細な議論はさておき，ここには従来のわれわれの議論から一歩進んだ論考がなされている点を積極的にとりあげておきたい。

むろん，先に詳しく議論したように，想起を行う主体にとって，かつての知覚は再現されないし，過去とは本来的に不在である。しかしながら，われわれは想起という活動によって，かつての〈身体の構え〉を復活させ，それが向かっていた対象に再びアプローチを試みることができるのである。不在の対象自体は甦るべくもないが，対象と自らの身体との関わり方それ自体は再び現れるのである。とすれば，そこには主体にとっての「不在物のリアリティ」と呼べるようなものの現れを認めてもよいだろう。高木のいう「身構えの回復」論は，そこからさらに一歩進んで，想起の主体ばかりでなく，それを聴く者にとっても感知可能な「不在物のリアリティ」を現出させるものである。その具体的なメカニズムについてはここで言及されていないものの，記憶の伝承を主題とするわれわれとしてはこれを重要な出発点としながら，具体的な検討を重ねていくことが求められよう。

2–5　記憶の伝承をめぐる困難

先の「自転車に乗れる身体」の問題を思い起こしつつ，議論を発展させてみよう。

いまここで，「自転車に乗れない」者が，「自転車に乗れる」者の語る「自転車に乗った」という出来事の想起を聴くとしよう。このように，両者において〈身体の構え〉が明確に異なる際に，そこにはどのようなリアリティの共有が可能になるだろうか。

具体的に考えよう。想起者は昨日の「自転車に乗った」出来事の想起を懸命に語る。「自転車に乗れない」者がそれをまた懸命に聴くとしても，本来的に，自転車に対する〈身体の構え〉は全く異なるがゆえに，自転車に乗れる者が知覚した世界の有り様をこの聴き手が直接知覚することは困難であると思われる。たとえば，「普段歩きながら見ている馴染んだ光景も，自転車で走りながらみると全く違った景色にみえる」といった常套表現があることからもわかるように，そこには，自転車に乗れるという〈身体の構え〉をもった者にしか知覚しえない，特有の世界の構造があるはずである。

したがって，自転車に乗れない者が，自転車に乗れる者の想起を聞いて同じように「身構え」ようとしても，そこに知覚可能なものの現れはあまり期待できないことになるだろう。このことは，自転車のみならず，たとえば，より特殊なスポーツや楽器などの技能にあてはめて考えるならばより顕著になると思われる。

そうした「特殊な」ものではなく，日常的なことがらの想起において，高木の理論は該当しうるのであろうか。ただし，本稿の関心である「記憶の伝承」という語り継ぎの問題にかんしていえば，そこにはつねに「特殊な語り」がつきまとうことを忘れてはならない。たとえば，いかにして「未曾有の」，そして「想定外の」震災を語り継ぎ，伝承していくのか，そしてまた，「理解不可能」とたびたび称されるホロコーストからの生還者の語りについても，実は同様なのである。

われわれは，〈身体の構え〉が異なることを前提に，不在物のリアリティという記憶の本質が他者に伝えられる可能性を検討せねばならない。この大きい困難はいかにして解決しうるのだろうか。

2–6　反復と伝承，身体的理解の可能性へ

ひとつの打開策として，ここで〈反復〉という新たな時間を導入してみたい。想起の反復，そし

て，想起を聴くことの反復，である。

想起の語り手と聴き手との間で〈身体の構え〉が異なったとしても，語り手が想起を反復して語り，また聴き手がそれを繰り返し聴き続けることで，そこに何か新たな理解といえるようなものが発生する可能性は期待できないだろうか。

ここでもわれわれは具体的な日常経験からはじめるしかない。

たとえば，次のような体験はあり得るだろうか。「あの人の昔話，最初は何の事だかさっぱりわからなかったけども，何度も何度もその語りに付き合っているうちに，なんとなく腑に落ちてくるようになった」というような経験である。じつは，こうした経験談は，たとえば高齢者や酷い災害に遭遇した人々との対話の機会が多い看護師や，高齢者向けの介護施設の職員などからよく聴かれる(6)。

その経験談を大まかにまとめると，以下のようである。彼ら彼女らは，自らが経験したことのない戦時中の様子や酷い災害時の状況，また，現在とはかけ離れたかつての暮らしぶりなど，明らかに〈身体の構え〉が異なる出来事を多く聴くことになるわけだが，長期にわたり何度もそれらを反復して聴くことで，その人々が向かっていた世界像がすこしずつ見えてくるとともに，その人びとのかつての生き方がしだいに感じられてくる，というのである。

われわれのことばでいえば，ここでいわれる「見えるようになって来る〈世界像〉」とは，過去となった〈不在物のリアリティ〉であり，「感じられてくる〈かつての生き方〉」とは，過去の世界にむかっていたそれぞれの〈身体の構え〉の有り様である。

そして，「見えてくる」とか「感じられてくる」ということばにあるように，ここで生じているのは，いわゆる「認知的な理解」というものとは若干異なるものであろう。看護師や施設職員は，自らに語られる想起を，認知的に・論理的に・合理的にただしく理解していく，というよりは，「すこしずつ見えてくる」とか「しだいに感じられてくる」というかたちで，すなわち身体をベースにした漸進的な知覚感覚的な理解が生じているのだと思われる。先の「（反復して聴くうちに）腑に落ちてくる」という言い方においても示唆されるように，ここでは“アタマの理解”というよりも，“カラダの理解”，とでもいうべき〈分かり方〉が生じているといえるだろう。これをわれわれのことばで表現するならば，〈身体の構え〉が少しずつながら聞き手に伝播し共有されつつある，といえるかもしれない。

では，われわれの日常的な経験としてもこのような事態は生じうるだろうか。

ところで，レヴィナスの他者論と武道的身体論をベースにさまざまな言論活動を行っている内田（2012）はつぎのように述べている。

> 僕はほんとうに非常にシビアな対立点がある場合には，相手の言葉にまず「うなずく」ところから始めるというのが，合意形成には非常に役立つと思っているんです。「うなずく」というのは，必ずしも「同意している」ということを意味しません。意見が違う人の話を聞く場合でも，「なるほど，そうですよね，そういうことってありますよね」と，とにかく首肯しながら聞く。身体でそういう動作を行いながら相手の話を聞き，向こうの語りのリズムとか，声のピッチにだんだん身体がなじんでくる。そうすると，なんとなくその人がその主張をなさざるを得ない「やむにやまれぬ事情」が頭じゃなくて，身体でわかってくる。「この人がこれだけきっぱり確信している以上，何か切ない事情があるのだろう」と思えてくる。

われわれとはやや異なった文脈ではあるけれども，ここには身体のもつ「認知的ではない理解の仕方」のひとつのスタイルが示されているといえよう。ここにおいても，短い期間ながらも繰り返し相手の話に「うなずき」，必ずしも認知的には同意せずともとりあえずは身体的に首肯を反復して続けることで，相手が向かっている身体の方向性に自分の身体を添わせていく様子が描かれている。そのように相手の身体に自らの身体を「なじませる」ようにしていくことによって，はじめは「シビアに対立」していた相手の意向が「身体で

わかってくる」というのである。こうした意味において，結果として次第にわかってくる「（相手の）やむにやまれぬ事情」とは，相手の主張の単なる背景というよりもむしろ，その主張を支える世界観であり，主張される対象に向かっている〈身体の構え〉であると解すべきだろう。

ただおそらくは，この一度きりの対話を通して見えてくるものは，まだ相手の一部にすぎないだろう。そもそも，聴き手のもつ〈身体の構え〉自体は，それなりの長い期間を経て形成されたものであり，自己の重要な構成部位とは無関係なわけはないのであるから，そう簡単に目の前の相手によってぶれたり更改されたりするものではないと思われる。前出の看護師や施設職員の「少しずつ」，「しだいに」ということばを思い起こしておこう。

おそらくは，一度きりではなく，何度も出会いの機会を設けつつ繰り返し反復して「聴く」という体験によって，相手の主張とともにある〈身体の構え〉が少しずつながら聴き手に伝播され，また共有されていくことになるのであろう。

ふたたび「ショアー」－むすびにかえて

このようなしかたで，ショアーを捉え返してみることは可能かもしれない。

ショアーの映画としての特異さとは，分かり易いフィクションの物語性ではなく，ただ証言のみが 9 時間半，延々と繰りだされることでもあった。

> ・・・この映画を見始めても，最初は「わけがわからない」。しかし，次々と登場して証言をする人物の身振りのようなものや目付きがそのうち何となく似てくることに気づく。しかし，その近似は，年齢や性別，人種などの属性によるものではないようである。また，それは加害者，被害者，傍観者，協力者の区別を超えているようにも思われる。9 時間を過ぎ，映画をそろそろ見終える段になってようやく，それは，何か「とてつもないもの」に出会った人々の〈身体の構え〉の共通性であることがわかってくる。そして，ランズマンが表現しようとしたことにようやく気付きかける・・・。(7)

むろんこれは筆者の一体験にすぎない。

しかし，この視聴を契機に，「あれはいったい何だったのか」という探索が止むことはなく（たとえば，松島（2004, 2005)），この映画を反復して視聴することも止められなくなってしまったことをここで告白しておこう。

※　　※　　※

想起の現在において，過去はつねに不在である。それをまったく異なる〈身体の構え〉で語られるとき，聴き手は大きな不安と戸惑いを覚えることであろう。そんな訳のわからぬものは聴きたくない，といって席をたつこともあるだろう。

しかし，その想起が聴き手の目の前で何度も反復されることによって，想起者がその不在にどのように向かっていたのか，向かおうとしていたのか，次第にみえてくることがある。ここにおいて，「わからない」という当初の認知的な状態を，決して悲観的に捉える必要はない。それは，むしろ身体で「わかる」ことの可能性へと開かれていたのである。

そろそろ紙幅が尽きてきた。われわれは，まだ始まったばかりのこの論考をより鍛え上げなければならない。とりわけ，記憶の伝承における，〈不在物のリアリティ〉という矛盾をはらんだ概念について，身体を繰り返し媒介させることでその矛盾が矛盾でなくなるような道を具体的に探索していかねばならないだろう（以下次号）。

※本稿は龍谷大学 2011 年度国内研究員研究成果報告の一部である。

注

(1)　大森は別書においては想起の際にあらわれる知覚的なものを総称して「知覚風景」と呼び，それは単に知覚的な想像に過ぎないと断言している（大森，1996)。さらに想起とは言語的制作であると主張しているが，想起における身体性を主題とする本論ではこの点については踏み込んで論じない。なお過去世界と言語を絡めて論じるものは他にも多く，生態心理学の祖である J. J. ギブソン

（1979）も「過去という時間を現出させるのは言語の働きである」と述べている。なお大森（1996）はまた，過去の想起は夢の想起と同質でありそれらは徹底して無根拠である，とも主張するが，この点については本稿は同意しない。

⑵　この言及は，初見ではやや理解しにくいかもしれないが，例えば日常的によく言われる「つらいときにはとりあえず笑ってごらん，そのうち心が少しずつ晴れてくるから」といったことばを連想してみると理解の補助になるだろう。

⑶　この〈身体の構え〉という名称は，後に紹介する高木（1996）の「身構えの回復」と題する論文に触発されて発想されたものである。

⑷　この「なんとなくの形」を書こう（描こう）とする身体部位は，なにも手でなくてよい。たとえば，頭を振ってみたり，場合によっては，腰を用いて「空書」をしても同様の効果が得られるだろう。このように身体部位に限局されないのも〈身体の構え〉の特徴といえよう。

⑸　クロード・ランズマン監督による 1985 年発表のフランス映画。ナチのユダヤ人虐殺に関係した人物（加害者，被害者，傍観者，協力者）の証言を集めた構成となっている。上映時間は 9 時間半で，製作にはおよそ 11 年間を費やしたといわれる。

なお「ショアー」とはヘブライ語で絶滅，破局，大惨事といった意味をもつ。ギリシア語起源の「ホロコースト」に替えてタイトルに用いられた。受賞歴として，1985 年，アメリカ，最良のドキュメンタリー映画賞，1985 年，フランス・ユダヤ教財団，芸術・文学・科学賞，1986 年，フランス，セザール名誉賞，1986 年，ドイツ，ベルリン映画祭，カリガリ賞，国際映画ジャーナリスト連盟賞，1993 年，オランダ，アムステルダム・レジスタンス賞など（高橋（1995）の解説による）。

⑹　以下の記述は，筆者が 2007 年から現在まで継続的に講師として参加している滋賀県看護協会看護師指導者養成講座における看護師らからの聞き取り，および，筆者が所属する龍谷大学社会学部臨床福祉学科卒業生で高齢者向けの介護施設などに勤務する職員からの聞き取りをベースにしている。

⑺　ショアーは 1995 年に日本において初めて公開されたが，劇場公開はなされず（ただし NHK 局でのテレビ放映はされた），日仏学院をはじめ有志が上映会を開いており，筆者は 1996 年 2 月 17 日の東京大学における鑑賞会（教育学部佐々木正人氏主催）においてこれを鑑賞した。なお 2004 年 6 月 24 日に DVD 版「ショアー」が発売された（日本ヘラルド映画）。

文献

Gibson, J. J.,（1979）. Ecological Approach to Visual Perception, Hillsdale, NJ. : Lawrence Erlbaum Associates.（古崎　敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬　晃（訳））,『生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る』, サイエンス社　1986）

蓮實重彦（1977）.『反＝日本語論』, 筑摩書房

松島恵介（2004）. 身体，行為，証言－「ショアー」における想起／忘却（Ⅰ）. 龍谷大学社会学部紀要　第 25 号.

松島恵介（2005）. 身体，行為，証言－「ショアー」における想起／忘却（Ⅱ）. 龍谷大学社会学部紀要　第 26 号.

水島　昇（2003）.『弓の真相』,「蛋白質　核酸酵素」. 共立出版，48, 1407–1411

大森荘蔵（1992）.『時間と自我』, 青土社

大森荘蔵（1996）.『時は流れず』, 青土社

Reed, E. S.（1994）. *Perception is to self as memory is to selves.* In U. Neisser & R. Fivush（Eds.）, The remembering self : Construction and accuracy in the self-narrative. pp.278–292, Cambridge University Press.

佐々木正人・渡辺　章（1983）.「空書」行動の出現と機能－表象の運動感覚的な成分について. 教育心理学研究，31(4)，273–282.

佐々木正人（1984）.「空書」行動の発達－その出現年齢と機能の分化. 教育心理学研究，32(1)，34–43.

佐々木正人・渡辺　章（1984）.「空書」行動の文化的起源－漢字圏・非漢字圏との比較. 教育心理学研究，32(3)，182–190.

Sasaki, M.（1987）. Why do Japanese write characters in space? International Journal of Behavioral Development, 10(2), 135–149.

高橋武智（1995）. 解説「SHOAH」（クロード・ランズマン著　高橋武智訳　作品社　1995）所収

高木光太郎（1996）.「身構えの回復」, 佐々木正人（編）『想起のフィールド：現在の中の過去』, 新曜社

内田樹（2012）.「人間関係に欠かせない身体と言葉の相乗効果」,『時局』, 2012 年 9 月号,（株）時局社

（「内田樹の研究室」http : //blog.tatsuru.com/2012/08/10_1256.php に加筆修正して再録）